

令和元年6月25日現在

機関番号：31302

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26284099

研究課題名(和文) 『類聚三代格』の史料学的研究

研究課題名(英文) The historical materials study of 'ruiju-sandaikyaku'

研究代表者

熊谷 公男 (KUMAGAI, Kimio)

東北学院大学・アジア流域文化研究所・名誉教授

研究者番号：70153343

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 5,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、弘仁・貞観・延喜の三代の格(律令の修正法)を内容によって分類、再編した『類聚三代格』の新たなテキストを作成することを目的とするもので、そのために必要な主要な写本について史料学的な検討を行いつつ各巻の底本を選び直し、校訂方針の明確化をはかった。その結果、古写本の文字をできるだけ尊重しながら原本の復原をめざすという基本方針を立て、研究代表者・研究分担者から巻ごとの担当者を定めて、協議をしながら校訂作業をすすめてきた。その成果の一部は論文の形で公表した。また出版社も決定し、全体を3分冊として2022年から順次刊行していく予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

古代の体系的な基本法である律令格式の分野では、日本思想大系『律令』や訳注日本史料『延喜式』など、新たなテキストの刊行が相ついでいる。そのなかで格の根本史料である『類聚三代格』は、なお80余年前に刊行された新訂増補国史大系本が標準テキストとされており、近年の研究の進展や新写本の発見等によってさまざまな問題が生じている。最大の問題は、現在では常識とされている古写本重視、原文尊重の立場が必ずしもとられていないことで、底本に近世の印本を用いたり、古写本の文字を印本や校訂者の判断によって改めることも見られる。そこで本研究で原本の復原という方針のもとに校訂を進め、新たなテキストの作成、刊行を進めている。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is make a new version text of 'Ruiju-Sandaikyaku'. Therefore we chose an basic text every winding while examining a necessary manuscript. And we clarified a policy of the revision. As a result, we made a basic policy to aim at the restoration of the original while respecting the letter of the copied book of old time as much as possible and established the person in charge every winding from a study representative, a study partaker, and pushed forward revision work while discussing it. In addition, we decide the publishing company and are going to publish the whole as 3 separate volumes sequentially from 2022.

研究分野：日本古代史

キーワード：律令格式 写本系統 金沢文庫本 前田家本 校訂 史料学 テキスト 類聚三代格

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

現在、一般に流布している『類聚三代格』(以下、『三代格』という)のテキストは、80余年前に刊行された新訂増補国史大系本(以下、国史大系本という)であるが、その後、『三代格』に関しては1970年前後に渡辺寛・飯田瑞穂・吉田孝の諸氏の研究が相ついで発表され、史料学的研究が大幅に進展した。それによって、大系本は十二巻本と二十巻本の巻次が混在しているという問題があること、『三代格』の欠失部分が全体の1割程度にとどまることなどが明らかとなった。ついで1972年に渡辺寛氏によって東北大学所蔵の狩野文庫本『類聚三代格』(抄本、室町時代写)が発見されて、巻四の唯一の伝本である前田家本(尊経閣文庫本)の闕逸箇所がかなりの程度復原できるようになった。このようなことから、古代史学界では、かねてより新知見を盛り込んだ『三代格』の新たなテキストの刊行が望まれていた。

2. 研究の目的

近年の『三代格』の史料学的研究の進展、古写本の新出などの状況をふまえて、『三代格』の史料学的研究をさらに進展させ、その成果をふまえて『三代格』の原本により近い、良質なテキストを作成して刊行することが本研究の目的である。

3. 研究の方法

『三代格』の主要な古写本には金沢文庫本系統と前田家本とがあるが、金沢文庫本は十二巻本、前田家本は十二巻本と二十巻本の取り合わせ本である。そこでまずこの両系統の写本の史料学的検討を行い、各巻の底本と対校本を選定し、テキスト校訂と本文復原の方針を定める必要がある。また狩野文庫本の発見によって国史大系本が巻四の底本として用いている前田家本の闕逸箇所を大幅に復原することができるようになったので、その復原方式を定める必要がある。

また近年の典籍校訂では古写本重視、原文尊重の立場が基本とされるようになったが、本研究でもそのような立場を継承したうえで、巻構成は原形と考えられる十二巻本の巻序に統一し、底本は古写本、ないしその忠実な転写本に限定して、対校本にも原則として同様の写本のみを使用するという方針を定めた。具体的には、巻五と巻十二は金沢文庫本の原本が伝存しているのでそれを、また巻一・三・七・八の四巻に関してはその転写本を、残りの六巻については前田家本を底本として用い、『三代格』編纂時の原本の復原をめざすこととした。

4. 研究成果

本研究の成果としてもっとも重要なのは、『三代格』としてははじめて原本の復原という明確な目標をたて、その実現のために古写本重視の立場から底本、対校本の選定を行い、校訂においても古写本の文字の尊重を基本方針として確立したことである。

金沢文庫本の原本、あるいは前田家本を底本とする巻では、校訂の方針は比較的立てやすいが、金沢文庫本の転写本を底本とする巻一・三・七・八の四巻については、具体的にどの写本を底本とし、対校本として何を選んだらよいかは、慎重な検討が必要である。底本・対校本の候補としては、鷹司家本、水谷川家本、東山御文庫十一冊本、陽明文庫本、中御門家本(巻三のみ)などがあげられるが、それぞれの写本のテキストとしての質、特性等を史料学的に検討した結果、底本としては、巻三が中御門家本、それ以外の巻一・七・八に関しては水谷川家本を用いることとし、対校本としては、鷹司家本・東山御文庫十一冊本・陽明文庫本、巻三ではそれに加えて水谷川家本などを用いることにして、六国史などは参考にはするが、系統の異なる史料なので、それを根拠に底本の文字を改めることはしない方針である。

水谷川家本については、金沢文庫本の忠実な転写本という評価が定着しているが、検討の結果、原本の傍書、抹消符などの書き込みについては、それらを反映する形で本文を書写しており、そのためその箇所では一行の文字数に増減が生じて、親本の形が崩れていることが判明した。この点は校訂において注意を要する。

また巻四に関しては、前田家本の闕逸箇所の復原をテキストとしてどのような形で行うかが問題となるが、これに関しては利用上の便宜を考えて、狩野文庫本や『令集解』『政事要略』等を用いて復原したものを本文として提示することにした。そのほかの巻については、校訂者の判断による本文の改変は原則として行わないこととし、明らかな誤字の場合も傍注などの表示にとどめることとした。

このような方針をとりながら、可能なかぎり原本に近いテキストを構築し、新たな『三代格』の校訂本の刊行に向けて、現在、科研メンバーで協議をしながら校訂作業を進めており、出版社も内定し、全体を3分冊として2022年から順次刊行していくという刊行計画も決まった。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計26件)

熊谷公男「奈良時代陸奥国北縁部における建郡と郡制」『古代東北の地域像と城柵』(高志書院)2019年、39~74頁、査読無

堀裕「天平十五年金光明最勝王経転読会と陸奥国 福島県江平遺跡出土木簡再考」『古代東北の地域像と城柵』(高志書院)2019年、75~95頁、査読無

遠藤慶太「六国史と源氏物語」『皇學館史学』34、2019年、31~60頁、査読無

熊谷公男「蝦夷・隼人と王権 隼人の奉仕形態を中心にして」『古代文学と隣接諸学』3(竹林舎)2019年、503~533頁、査読無

熊谷公男「陸奥国上治郡考」『東北学院大学東北文化研究所紀要』50号、2018年、1~24頁、

査読無

熊谷公男「大化改新研究の新潮流と七世紀史研究のこれから」『歴史評論』821号、2018年、5～16頁、査読有

遠藤慶太「年号と祥瑞 九世紀以前の年号命名をめぐって」『日本歴史』846、2018年、1～14頁、査読有

小倉慈司「「退位」「讓位」の誕生」『日本歴史』840、2018年、2～13頁、査読有

小倉慈司「古代文献史料本文研究の課題 『延喜式』を中心に」『九州史学』181、2018年、28～55頁、査読無

小倉慈司「神戸の存在形態と神社経済」『古代文学と隣接諸学』7（竹林舎）2018年、324～361頁、査読無

小倉慈司「『延喜式』写本系統の基礎的研究 巻五を中心に」『日本古代史の方法と意義』（勉誠出版）2018年、192～217頁、査読無

小倉慈司「『延喜式』土御門本と近衛本の検討 巻五を中心に」『史料・史跡と古代社会』（吉川弘文館）2018年、164～192頁、査読無

川尻秋生「使者と文書」『日本古代史の方法と意義』（勉誠出版）2018年、111～127頁、査読無

川尻秋生「九世紀における唐制受容の一様相 中世文書様式成立の史的前提」『日本史研究』667、2018年、1～23頁、査読有

新井重行「『類聚三代格』における格の追補 尊経閣文庫本の朱訓点の検討から」『史料・史跡と古代社会』（吉川弘文館）2018年、193～215頁、査読無

川尻秋生「古代東国の在地社会と仏教 村落寺院・開発・双堂」『民衆史研究』93、2017年、31～50頁、査読無

熊谷公男「古代蝦夷（エミシ）の実像に迫る」『上代文学』117、1～18頁、2016年、査読有

遠藤慶太「難波津の歌の広がり 大伴家持の「桜花」詠をめぐって」『萬葉集研究』36、171～197頁、2016年、査読有

鹿内浩胤「金沢文庫旧蔵本『類聚三代格』とその転写本」『国史談話会雑誌』56、30～44頁、2015年、査読有

堀裕「国分寺と国分尼寺の完成 - 聖武・孝謙・称徳と安居 -」『国史談話会雑誌』56、45～60頁、2015年、査読有

①熊谷公男「坂上田村麻呂 征夷副將軍になるまでを中心に」『古代の人物』4（清文堂出版）57～87頁、2015年、査読無

②川尻秋生「古代の運河と交通」『日本古代の運河と水上交通』（八木書店）3～24頁、2015年、査読無

③川尻秋生「文の場 「場」の変化と漢詩文・和歌・「記」 「文」の環境 文学以前」（勉誠出版）378～404頁、2015年、査読無

④川尻秋生「弘法大師の成立 真言宗の分裂と統合」『仏教文明と世俗秩序 国家・社会・聖地の形成』（勉誠出版）151～184、2015年、査読無

⑤小倉慈司「日記における記主の官職名表記についての検討」『日記・古記録の世界』（思文閣）271～290頁、2015年、査読無

⑥堀裕「平安新仏教と東アジア」『岩波講座日本歴史』4（岩波書店）249～282頁、2014年、査読無

〔学会発表〕（計10件）

小倉慈司「陽明文庫本『勸例』に見える8・9世紀史料」陽明文庫設立80周年記念特別研究集会、東京大学伊藤国際学術研究センター、2018

小倉慈司「古代文献史料研究の課題 『延喜式』を中心に」九州史学研究会、九州大学、招待講演、2017

川尻秋生「九世紀における唐制受容の一様相 中世文書様式成立の史的前提」日本史研究会大会（個別報告）、2017

堀裕「道鏡任法王の基礎的考察」読史会、京都大学、招待講演、2017

堀裕「王権」研究と天皇の歴史的展開 死・身体・霊」外国専門家招聘講演会、韓国・忠南大学校、国際学会、招待講演、2017-01-25

堀裕「天皇と日宋の仏教文化」第15回グレートブッダシンポジウム、奈良市東大寺、2016-12

川尻秋生「古代東国の在地社会と仏教」民衆史研究会2016年度大会シンポジウム 古代の仏教受容と在地支配、早稲田大学、2016-11-27

熊谷公男「日本古代の対外関係と軍事・外交」2016年度日本史研究会大会全体会シンポジウム、立命館大学大阪いばらきキャンパス、2016-10-08

熊谷公男「蝦夷の居住地と文化」平成28年度上代文学学会大会講演会、コラッセ福島、招待講演、2016-05-14

熊谷公男「秋田城の歴史的展開」総括シンポジウム「北方世界と秋田城」、秋田市中央公民館、2014-12-27

〔図書〕（計10件）

吉村武彦・川尻秋生ほか『市川市史 歴史編 まつりごとの展開』市川市、470頁、2019年

小口雅史・関根達人・七海雅人・柳原敏昭・熊谷公男ほか『青森県史通史編 1 原始・古代・中世』青森県、788 頁、2018 年
川尻秋生『古代の東国 2 坂東の成立 奈良・飛鳥時代』吉川弘文館、266 頁、2017 年
村井章介・稲本泰生・増記隆介・柳幹康・堀裕・上川通夫『日宋交流期の東大寺』法藏館、136 頁、2017 年
熊谷公男編著『アテルイと東北古代史』高志書院、264 頁、2016 年
遠藤慶太『六国史 日本書紀に始まる古代の「正史」』(中公新書)中央公論社、248 頁、2016 年
国立歴史民俗博物館・小倉慈司編『古代東アジアと文字文化』同成社、209 頁、2016 年
遠藤慶太『日本書紀の形成と諸資料』塙書房、382 頁、2015 年
熊谷公男編著『蝦夷と城柵の時代』(東北の古代史 3)吉川弘文館、268 頁、2015 年
国立歴史民俗博物館・小倉慈司編『文字がつなく 古代の日本列島と朝鮮半島』国立歴史民俗博物館、247 頁、2014 年

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：小倉 慈司

ローマ字氏名：OGURA Shigeji

所属研究機関名：国立歴史民俗博物館

部局名：大学共同利用機関等の部局等

職名：准教授

研究者番号(8桁)：20581101

研究分担者氏名：堀 裕

ローマ字氏名：HORI Yutaka

所属研究機関名：東北大学

部局名：文学研究科

職名：准教授

研究者番号(8桁)：50310769

研究分担者氏名：川尻 秋生

ローマ字氏名：KAWAJIRI Akio

所属研究機関名：早稲田大学

部局名：文学学術院

職名：教授

研究者番号(8桁)：70250173

研究分担者氏名：遠藤 慶太

ローマ字氏名：ENDO Keita

所属研究機関名：皇學館大学

部局名：文学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：90410927

(2)研究協力者

研究協力者氏名：鹿内 浩胤(宮内庁書陵部)

ローマ字氏名：SHIKANAI Hirothane

研究協力者氏名：新井 重行(宮内庁書陵部)

ローマ字氏名：ARAI Shigeyuki

研究協力者氏名：福島 真理子（宮内庁書陵部）
ローマ字氏名：FUKUSHIMA Mariko

研究協力者氏名：中村 憲司（早稲田大学大学院）
ローマ字氏名：NAKAMURA Kenji

研究協力者氏名：佐藤 早樹子（早稲田大学大学院）
ローマ字氏名：SATO Sakiko

研究協力者氏名：佐藤 真海（東北大学大学院）
ローマ字氏名：SATO Masami

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。